

《書評》

『学校の建築と教育——学校化・教育改革・境界人』

四方利明\*著、阿吽社、2018年

齋藤尚志†

「竜宮城」と呼ばれる学校、瓦を葺いた切妻屋根の蔵のような校舎、隠れ家のある教室、教室後方に置かれるサイコロのようなコンクリート造りのトイレ、校舎全体が屋根に覆われ、風呂もある学校などなど、実にユニークな学校建築が次々と登場する。築半世紀を超えて現存する木造校舎もどこか懐かしく、暖かい。

これまで、著者はイヴァン・イリイチを補助線とした、現代教育改革への鋭い分析・批判を行ってきた。一例をあげると、子どもの貧困対策としての学力保障のとりくみに対して、かえって子ども自身に「低学力」の原因をみずからの「努力」不足に帰させ、不平等な社会そのものを不問とし、その仕組みへの自発的服従を促すことになると警鐘を鳴らす（四方、2016）。

本書においても、1980年代以降から現在までの教育改革の動向を読み解く際に、その教育改革の動きこそ、「学校という場を、子どもたちへの教育的な機能という『中心』的な機能を効率よく発揮する場へと特化させ、学校において、学ぶという自律的かつ創造的な相互行為を、教育という商品の個別の供給・消費プロセスに置き換えていく『学校化』を進行させている、張本人である」（はしがき）とする。そのうえで、「本書では、このような教育改革の動きや、教育改革の動きに対応しようとする学校建築のありようを批判的にとらえ」、「校舎や校舎と人々とのかかわりのなかに、教育改革に包囲され『学校化』が進行する学校の窮屈な状況を脱するための手がかりを探りたい」と本書の意義を明示する。

それでは、本書の概要についてみてみよう。目次は以下のとおりである。

はしがき

序章 学校建築をみる視点

第1章 学校建築の歴史

第2章 教育改革と学校建築

第3章 「境界人」としての建築家

第4章 地に根ざす学校建築

第5章 学校統廃合と学校建築

第6章 学校建築の諸相

---

\* 立命館大学経済学部教授

† 京都文教短期大学幼児教育学科准教授  
h5a12f22n26@gmail.com

## あとがき

79の学校建築・校舎が登場する。まず序章では、学校建築をみる視点として、「境界」および「境界人」の説明がなされる。「学校という場」は、「教育的な機能から外れた、もしくはそうした機能を裏切る、『周縁』的な位置づけを付与されがちな『非日常』の出来事も含めて成り立っている」場である。しかし、今日の学校をめぐる状況は、「学校から『周縁』部分を排除し、『中心』に位置する、子どもたちに対する教育的な機能を効率的に発揮させる場に特化しようとして」おり、「今日の教育改革の動向が、学校から、自律的かつ創造的な多様なかわりが生成する余地を奪いかねない」と危惧する。

このような現状認識に基づいて、著者は「『周縁』たる学校建築を、学校の『中心』に対置するだけでなく、学校の『周縁』について、学校のソトの価値観がウチ側にもたらされることで学校という『共同体』における『中心』的な価値観が相対化される、学校の『境界』として考えたい」という。また「学校の『中心』的な価値観とは異なる学校のソトの価値観を学校のウチ側にもちこむことで学校の自明性を相対化してくれる『境界人』」に着目する。具体的には、建築家、地域住民、廃校舎活用を手がける人たちなどである。

第1章では、藩校や私塾などの近代以前の学校建築が紹介される。また近代学校の特徴として、フーコーの議論を参照し、「近代学校の教室の設えそのものが、近代学校に適応したふるまいを身につけさせることによって、近代社会への『自発的服従』を調達するという、子どもたちへの教育的な機能を担っている」ことが説明される。さらに、1872（明治5）年「学制」直後の擬洋風の校舎、住民自治の場としての京都・番組小学校、「質朴堅牢」な北側片廊下型校舎へ画一化していった経緯なども紹介・解説されていく。

第2章では、まず1980年代以降今日に至るまで30年以上継続中の教育改革を新自由主義的な教育改革であるとし解説していく。そのうえで、同時期に登場した「新しい」学校建築の動向であるオープンスクール型校舎の流行と、複合化した学校施設の事例を取り上げる。フーコーやリチャード・セネットによる議論を用いて、一斉教授に対応した従来の教室以上に「一望監視装置」と化する「教育改革のためのオープンスクール」の分析は明快だ。

第3章では、「境界人」として7人の建築家が登場する。彼らは「教育的な機能が『中心』に据えられた学校のウチ側に、自らの建築思想というソトの価値観をすべりこませようとすることで、学校のウチとソトを媒介する」存在とされている。東野高等学校の自動販売機の設置をめぐる生徒の自律性・創造性の発揮についてのエピソードは、建築家が介在したからこそのものであり、とてもユニークである。「サイコロのごときコンクリートの箱」のトイレが教室後方に位置する御杖小学校は独創的だ。

第4章では、「学校が位置する地に固有の、すなわちヴァナキュラーな校舎」と、「境界人」としての地域住民の姿が描かれる。「ヴァナキュラーな校舎」は、現在も「地域に根ざす校舎」と、かつて「地域に根ざしてきた校舎」に分けられ、とくに後者のなかでも、旧京都市立清水小学校の校舎は誠に壮観だ。「教育的な機能からはみ出す『余白』の部分にまで目配りのきいた丁寧な仕事ぶりが光り、校舎を手がけた人々の想いのこもったすばらしいとしかいいようのない校舎」と著者は評する。

第5章では、学校建築の観点から京都府南山城村と京都市、および兵庫県神河町における学校統廃合を取りあげ、複合施設となった京都御池中学校など、統合校の現校舎と、京都国際マンガミュー

ジウムとなった旧京都市立龍池小学校校舎など、閉校となった各地区の旧校舎の活用状況が紹介される。閉校によって「中心」的な機能である教育的な機能を喪失した校舎が、「周縁」的に担ってきたコミュニティセンターとしての役割を主として担うことになり、どのように変わっていったのかが描かれている。

第6章では、まず「廃校舎の再生」として前章以外の事例が登場する。美術館、福祉事業所、宿泊体験施設、フリースクールなど多様な形で活用されており、「校舎と人々とのかわりが自律的かつ創造的で、校舎がいきいきとしている」様子が紹介される。それは、かつてもあった校舎と人びととのかわりを取り戻すかのようでもある。次に、「明るく清潔なトイレ」、東日本大震災の被災校舎および関東大震災後の防災という観点を強く意識した「復興小学校」、そもそも校舎でない建物を校舎として利用するブラジル人学校校舎などが登場し、教育的機能に特化しがちな日本の学校建築のありようを相対化し、校舎の多様な可能性が提示される。最後に、「木造校舎の復権」として1980年代以降のバラエティに富んだ木造校舎が紹介されていく。もちろん安易に復権を説くのではなく、「教育的な意義を前面に押し出した木造校舎の推奨は、何か別の『大人の事情』」、「その裏に隠蔽し合理化したい『大人の事情』」のあることを指摘することも忘れていない。

ところで、読み進めるうちに一つの素朴な疑問が浮かんできた。1980年代以降現在に至る教育改革、すなわち「学校教育に競争原理をもちこむ新自由主義的な教育改革」が進むなかで、この時期に登場したオープンスクールは「『周縁』＝『境界』的な空間ではなく、教育的配慮に満ちた学校の『中心』的な空間にほかならない」ようになってしまったという。それでは同じ時期に、なぜ「境界人」としての建築家や、教育的な機能を「周縁」に置くようなユニークすぎる校舎が登場してきたのであろうか。

1980年代以降の教育改革、とくに臨時教育審議会による教育改革は、従来の教育改革にはない新しい観点が加わったという指摘（尾崎，1991：5頁）がある。その新しい観点とは、「個人がどのような学習システムを利用するか、あるいはそのために公的にどのような制度が準備されるべきかといった、社会制度論的な観点」である。もう少し言うと、この教育改革は、人間形成を「『主体的』個人の自由な選択」にゆだね、「個人が立脚する社会意識上に放任し、その意識形成の基盤がコントロールされることによって間接的に理想的人間が生み出される」と考える。「意識形成の基盤」をコントロールするところにイリイチの「学校化」が生じる。そうとはいえども、「『主体的』個人の自由な選択」にゆだねるなかで、ゆだねるからこそ「境界人」としての建築家や、教育的な機能を「周縁」に置くようなユニークすぎる校舎も登場してきたとも考えられる。

そうであるならば、現在も人間形成は「『主体的』個人の自由の選択」にゆだねられている。しかし「意識形成の基盤」の「中心」では競争を煽られ、格差が生じている。そこでの「主体的」個人は、自己管理と自己規制を引き受け、自己責任をも招き入れている。それでは「周縁」＝「境界」ではどうなのか。「周縁」＝「境界」にあって、ソトの価値をウチ側にもちこみ、自己責任などの「中心」の価値を相対化することは可能なのであろうか。

先に、著者がイリイチを補助線として現代教育を分析・批判してきたと紹介した。著者は分析・批判に加え、展望（希望）も掲げている。すなわち、「コンヴィヴィアルな学び」の提唱である。「コンヴィヴィアリティ」とは「人どうし、あるいは人と環境との、自律的かつ創造的なかわりのこと」を意味する。たとえば、貧困に直面している子どもには「学力」で追い立てるのではなく、「教育も子どもたちもともに受け止め、お互いがじっくりかわるための時間的、精神的ゆとりを創出

すること」、「自律的かつ創造的にともに学ぶための余地を確保すること」である。そして「そのような学びによって、貧困を生み出す社会のありようそのものをとらえかえし、少しでも現状を変え  
るための手だてを考える地点にまで到達すること」である。

本書において著者は、「教育改革に包囲され『学校化』が進行する学校の窮屈な状況」のなかでも  
自律的かつ創造的なものを探ろうとする。たとえば、鯖江市立中河小学校では、大人が「デン」と  
いう隠れ場所などまでさまざまに施設・設備を用意する。しかし、子どもはそれに順応し、ソフト  
な管理を受け入れるどころか逆に、大人の思惑を超えて、自分なりの「デン」という隠れ場所を施  
設・設備の「余白」の部分に作り出していく。著者はそのような子どもの自律的かつ創造的なあり  
ように着目し、「教育的な機能からはみ出す『周縁』的な『余白』・『遊び』の空間」を子どもにゆ  
だねるのがよいと説く。そこに「中心」の価値を相対化する希望を見いだしているようだ。

このように考えてみると、この本は、著者自身が学校のウチとソトを媒介する「境界人」となっ  
て「学校において『周縁』に位置づけられがちな、校舎や校舎と人々との自律的かつ創造的ななか  
わり」を探った「コンヴィヴィアルな学び」の記録であると思えてくる。

#### 参考文献

尾崎ムゲン（1991）『戦後教育史論——民主主義教育の陥弄』インパクト出版会。

四方利明（2016）「貧困は『学力』問題？——イヴァン・イリイチ『脱学校の社会』を読み直す」『教育と文化』84  
号，8-15頁。